



日本新軍歌

目次

◎喇叭吹奏歌

○海ゆかば……………六丁

○皇御國……………六丁

○國の鎮め……………六丁

○命をすて……………六丁

◎軍歌

○來れや來れ自一至九……………六丁

○櫻の歌……………八丁

○楠公櫻井驛にて正行へ遺訓の歌……………十丁

○小楠公を詠する歌……………十丁

○晉我復讐……………十二丁

○熊谷直實 曉に教盛を追ふ歌……………十二丁

○熊本籠城の歌……………十四丁

○師の別れを惜む……………十六丁

○入學……………十六丁

○卒業……………十七丁

○正行	十七丁
○花は櫻木	十八丁
○丈夫	十八丁
○花月の歌	十九丁
○福島中佐歓迎の歌	廿一丁
○元冠の歌	廿二丁
○デニンソン氏輕騎隊進撃の	廿三丁
○日本魂	廿四丁
○我海軍	廿四丁
○成歡驛喇叭卒	廿五丁
○喇叭手の最後	廿七丁
○林子平	廿八丁
○仰げや仰げ	廿九丁
○攻戦	卅丁
○赤心	卅一丁

文部省告示大祭祝日歌詞



君が代は古
 林 廣守作曲
 君が代は
 ちよにやちよに
 さゞれいゝの
 巖となりて
 こけのむすまで

勅語奉答
 勝 安房作歌
 小山作之助作曲
 あやに畏き天皇の
 あやに尊き天皇の
 是ぞめでたき日本の
 是ぞめでたき日本の
 是ぞめでたき日本の
 是ぞめでたき日本の
 あやに畏き天皇の
 あやに尊き天皇の
 二月一日
 千家尊福作歌
 上 眞行作曲

第一 第一章
 年のはじめ乃例として
 終なき世のめでたさを

松竹たて、門をどに

第二章

祝ふ今日ころ樂けれ

初日のひかり明けく
君が御影に比へつ、

治る御代の今朝の空
仰き見ころ尊とけれ

元始祭

鈴木重嶺作歌
葛鎮作曲

天津日嗣の際限なく
年のはじめは皇神を
四方の民草うち靡き
豊祭のぼる日の御旗

天津璽の動きなく
祭りますすころ畏けれ
長閑けき空を打仰ぎ
建て祝はぬ家ぞなき

紀元節

高崎正風作歌
伊澤修二作曲

第一章

雲に聳ゆる高千穂の
靡き伏る大御世

高根下し草も木も
仰ぐ今日ころ樂けれ

第二章

海原なせる埴安の

池の面より猶ひろき

惠の波に浴みし世を

仰ぐけふころ樂けれ

第三章

天津ひつぎの高御座
基定めしうのかみを

千代万代に動きなき
仰ぐけふころ樂けれ

第四章

空に輝く日のもと
國の御柱たてし世を

萬の國よあぐひなき
仰ぐけふころ樂けれ

神嘗祭

木村正辭作歌
寺節作曲

五十鈴の宮の大前に
御酒御帛を奉つり
靡く御旗も輝きて

今年の秋の懸税
祝ふ明日の朝日かけ
賑御代ころめでたけれ

天長節

黒川眞東作歌
好義作曲

今日の吉日へ大君の
今日の吉日へ御光の
光り遍ねき君が代を

生れ給ひし吉日なり
さし出給し吉日なり
祝へ諸人もろどもに

恵み遍ねき君が代を
 祝へ諸人もろとも
 新嘗祭
小中村清矩作歌
高節竹曲
 民やすかれど二月の
 祈年祭
 千町の小田よ打靡く
 垂穂の稲の美稲
 御饌につくりて奉る
 新嘗祭尊しや



日本新軍歌

海ゆかば
 山かか
 大君か
 海ゆかば
 山かか
 大君か
 のばみくづ
 草ひす
 へよこそしあめ
 屍屍

將官及相當官并ニ將官ノ職ヲ奉スル
大佐ニ對シ敬禮ヲ奏スル并ニ用フ

皇御國の武士は
 何ある事をか勉むべき
 唯身にもてる誠心を
 我大君に盡すのみ
 軍隊相逢フ并ニ用フ
 靖國神社參拜等ニ用フ

國の鎮めのみやしるに
 いつさまつれる神靈
 今日祭の賑ひを
 天翔りてもみそあはせ
 治まる御代を守りませ
 命をすて、一般葬禮ニ用フ

命をすて、大丈夫が
 建てし功績は天地の
 有るべき限り語りつき
 言つきゆかひ後の世に
 絶ねせず盡さじ萬世に

扶桑歌 第一 分別式ノ并ニ用フ
 軍歌 第一
 來れや來れいざ來れ 御國守らん諸共に

寄せ来る敵は多くとも
死すとも退くこと勿れ

全 第二

進めや進めいざ進め
劔は林を爲すとも
死すとも退くこと勿れ

全 第三

勇めや勇め皆勇め
御國を守るつゝものは
死すとも退くこと勿れ

全 第四

勉めや勉め皆共に
汚せま者ぞ後の世に
死すとも退くこと勿れ

全 第五

懐へよ懐へ能く懐へ
我等の失せざる其中は
死すとも退くこと勿れ

恐る、勿れ恐る、あ
御國の爲あり君のため

彈丸は霞と飛び來るも
ためらふ事なく進行け
御國の爲あり君のため

劔も彈丸もなんのその
身は鐵よりも尙は堅し
御國の爲あり君のため

汚れし事なき國の名を
言れぬ様に覺悟して
御國の爲あり君のため

神より受けたる此國は
決して人手に渡さじと
御國の爲あり君のため

全 第六

守れや守れ能く守れ
恐る、ものは父母の
死すとも退くこと勿れ

全 第七

恐る、勿れ恐る、あ
國をば愛づる兵に
死すとも退くこと勿れ

全 第八

進めや進め皆進め
命を惜まず進み行け
死すとも退くこと勿れ

全 第九

進めや進め皆進め
進めや進め皆進め
死すとも退くこと勿れ

異國の奴隷とあるを
墳墓の國をば能く守れ
御國の爲あり君のため

民をば愛づる我君を
勝べき者は世にあらす
御國の爲あり君のため

腐りし心の無きものは
御國の旗を押立て、
御國の爲あり君のため

御國の旗を押立て、
祖先の國を守りつゝ、
御國の爲あり君のため

御國の旗を押立て、
祖先の國を守りつゝ、
御國の爲あり君のため

我、國守る武士の
櫻の歌

日本魂を人間に

朝日に匂ふ山櫻
御階の花に風吹かば
禦取直去て守るべし
其色其香妙なるも
花散るとは無きぞかし
聖帝の大御代と
櫻花こそ愛わけれ
夜る行宮に忍び入り
赤さ心を庭ざくら
世も稀なる忠烈は
然れば今尙は武士が
三郎如き忠臣を
帝に仇する者あるか
思義の劔振りかざし
國平らけく安らけく
廣き世界に輝かし
千とせの春を迎へんと
我が武士の忠烈の
櫻と共に例し無し

咲くや霞も九重の
守れやく武士よ
櫻は忠義の花なるぞ
浮薄の風に誘はれて
千代萬代も動かざる
共に世界にしなき
昔し兒島の三郎は
十字の詩をも作りなし
花と其香を競ひたる
鬼神とてもおぢぬべし
花見るたびに古への
羨み慕ひいそしくも
國に敵する者あらば
只一撃に斬り倒さ
聖帝の御稜威をば
櫻の花と諸共に
矢たけ心のいや勝る
櫻と共に例し無し

實になさけある武夫の
その身は遂に世を這れ
圓光大師を師と頼み
晝夜念佛怠らず
熊本籠城の歌

西も東もみな敵ぞ
寄せ来る敵は不知火の
世にも名高き猛ら夫の
西九州に名も高き
敵の總督隆盛は
之に従ふ大將の
中にも逸見十郎太
其外兵士二三萬
進み打出す砲聲に
天地の崩れ山河は
動かぬものは君が御代
忠義の旗を打振りつ
唯一筋に國の爲め

心の中ぞあはれなり
蓮生法師と名のりつ
剃髮法衣の身と成て
目出度往生遂げにけり

南も北もみな敵ぞ
筑紫のはての薩摩瀧
たけり狂ふて攻め來り
熊本城を圍みけり
古今無双の豪傑ぞ
桐野篠原村田あど
慄悍決死の烈丈夫
何れおどらぬ薩摩武士
天地も崩る、ばかりなり
裂るためしのあらばとて
城の中なる官軍の
死を視る歸する如くにて
進みす、んで防戦す

過ぎし普佛の戦に
長く青史を汚したり
千早の城の備公か
谷少將を始とし
家をも身をも打忘れ
此時都の方よりは
多くの官軍出陣す
空飛ぶ鳥のそれならで
城中城外もろとも
折柄たけさ若者が
單身剣を提さげて
蟻のひひ出る隙なき
都の軍に身を投じ
語りつ問ひつ示しあひ
爰に始めて連絡の
池中の魚も時を得て
進めくの號令に
西北南東ある

蕞士の城の降りしは
それにはあらで城中の
睢陽城の張巡か
下兵卒に至るまで
一心不亂に防戦す
錦の御旗をひるがへし
されども城の連絡の
翼なければ通ひ得ず
音信する由なかりけり
國の爲とて健氣にも
城を出でつ、夜に乘じ
賊圍の中を潜り出で
城の中なる有様を
賊兵原を打破り
解けて嬉しき厚氷り
跳る心の活潑地
萬銃天地に鳴り響き
圍める賊をうち攘ひ

空前絶後の功を立て
我日の本の益長雄を
譽め羨まぬものぞなき

名を揚げ父母を顯せし
譽め羨まぬ者ぞなき

師の別れを惜む

父と母とは我を生み
身に藝わざを教へつ、
老先よかれ幸あれと
日にく登る学校の
されば血社に分ねども
同胞としも思はる、
玉の光のつやくと
ありく此處に打列ぶ
斯くも樂み後々も
學校の今日建ちて
實にや樂しき事ぞかし

入學

家庭の教のあるなれど
夜となく晝と無心して
圖らぬ日迎無きものは
誨へて倦まぬ師の恩ぞ
父と兄との情あり
恩みを受る日もありて
外容のみならで誠まで
砥石と恃む朋友と
日に諸共にまう登る
祝ひ壽ぐ此さまは
實にや樂しき事ぞかし

今日吉日と知るからに
迎りくて深山路や
學びの道のふみはじめ
深さまにく分入りて

時ち見ゆる山の脊や
知らぬ事知る嬉しさは
今より嬉みいそしみて
導きするの師の業ぞ
教ふる業の師の力
學ぶは人の力より
心に願へ生徒よ

卒業

塵も積れば山となる
日々の學びの些と
勉めて積める智慧の山
色は變れを理りは
萬のわざに行わたり
學びおふせて讀書さへ
最も愛たきことにあむ

○正行

湊がわらの夕げしき
河のながれの菊水の

高嶺に登りありくと
今日ぞ分入る初ぞと
登れやくいざ登れ
歩ひは其身の業と知れ
教へらるゝの我が力
己が力の多かれと
人にな依りそ勉めよ

世の諺ぞ眞なる
些としも思はずて
たなびく霞麗はしく
一理ならめど心して
學びの科を全べて
身に新今日と成ぬるの
最も愛たきことにあむ

忠義一圖に跡とめて
紋にさかまく水烟り

音も數万のときの聲
思ふ建武の其むかし

○花の櫻木

花は櫻木ひとは武士
さきし櫻は春そらに
ときに一朝風吹かば
武士の行ひ一すじに
よわき物には目を掛て
若も異國に事あらば
敵は幾萬有りども
之ぞ自慢の事なれや

○丈夫

我丈夫の山行かば
水つく骸と昔より
人生僅五十年
名を汚すべき事やある
君に捧ぐる命ぞや
敵の矢玉を背に負ふな

きけばさく程の凄し
君が珠明の

共に名にあふ國の寶
赤き心に香をはなつ
ちりて後こそ潔よく
常はやさしき物ぞかし
何も威有て猛からず
頼む御旗のすゝむ時
討ちて拂はん村田銃
花は櫻木ひとは武士

草むす屍海往かば
誓ひて國に盡しけり
命惜みて萬代の
息ある限り進み撃て
國の譽を増そ身ぞや
面を向けて進み往け

進みくくして顧みず
東洋平和の守護神と
進めや進め益荒雄よ

驚れて止まぬ魂は
末の代かけて祭られむ
進めや進め益荒雄よ

花月の歌

月と花とは昔より
誰が喜ばぬ人がある
心につれて憂事の
足柄山の風すこく
これより遠く陸奥へ
死ぬか生るか白河の
勿來の關の春のくれ
都の空は花ぐもり
櫻の雪は將軍の
鞍の枕に夜は慣れて
越路の山の月白く
故郷の空にかへるぞと
花の都はあれはて、
今宵一夜の宿願心

誰が樂まぬ人がある
然はさりながら月花も
種とあれるも多からん
松風にそふ簫の音も
いくさといへば身の末の
關を雲やは隔つらん
駒をとゞめて眺むれば
鎧の袖に散りかゝる
露の霜より尙白し
秋のあはれも知ざれど
雲間を渡る鴈が音も
思へば我もあつかし、
何處が我身の置きどころ
櫻の露に袖ぬれて

滅亡爰にさはまりし
佞人ばらの讒により
二人ともあき賢臣は
御衣を捧げて涙なる
我君今は賊の爲め
無念の心やる瀬なく
我が赤心を申さんに
月の光りや花の香や
更に變りはあさるに
月を見て酔ひ花を見て
只一場の夢の間に
世のなり行ぞ無常あれ
上には君を煩はし
國の亂る、その時は
花の色香は匂ふとも
されば世間の諸人よ
國の光りを東海の
國のはまれを三芳野の

平家の末ぞ悲しけれ
諫めの言葉容られず
筑紫の浦の詫居
心の底は如何ならん
遠き關路に幸き給ふ
十字をしるす櫻の樹
杯か多言を要すべき
經萬年を経るとても
常あさものは世の治亂
睡れる春の手枕の
うつれる興廢存亡の
若しも世運の拙なくて
下には民に苦勞させ
月の光はか々やくも
あど樂しみのあるべきぞ
今より真心引起し
月よりも信か々やかし
花よりも尙香はしく

するこそ今の勤めなり
樂しき月見して見たや

誓ひて斯もあせし後
樂しき花見して見たや

○福島中佐歓迎の歌

文學博士 黒川真頼大人

第一章

ひどはねどろくたびぢなり
ひどはあやぶむたびぢなり
すぎゆくみちはすうせんり
わけゆくみちのみかいのち
ひどのねそるしべりやの
みちひとりゆくたびぢるも
かふるさかひにれもひたつ
ふくしませうさのをしさよ
さみべるりんをいづるとき
こまにうちのりいひけらく
なるどならぬのふたみちぞ
そのひとみちはしぬるのみ
さらばといひてうつむちの
ねとこそみくにといまれど
ゆくへもしらすしらくもに
かげだにみぬすしらくもに

第二章

ゆけはてなしさばくのち
ひどげまれなりひろのはら
わくれどつきすいはへやま
とりもこそせぬみねつゝさ
すぎゆくみちのれうじうの
ますらたけをもしらぬみち

ふみわけこねてつゝがなく
きやくだにつくぞいさましさ
ことなしをへぬさらばとて
てるひのもとにかへるきみ
たかきいさをにくらぶれば
うらるのやまもふもとなり
といろくみなにくらぶれば
いるてすがはれたともなし
かたりつたへむよろづよに
ふみにつたへんよろづよに

○元寇の歌

作者未詳

四百餘州を擧る
十萬餘騎の敵
國難こゝに見る
弘安四年夏のころ
何ぞ恐れんわれに
鎌倉男子あり
正義武斷の名
一喝して世に示す

たぐ々良濱邊の夷

そは何蒙古勢
俱に天を戴かず
いでや進みて忠義に
鍛ひし我が腕
比處ぞ國のため
日本刀試し見ん

こゝろ筑紫の海に
浪押分けて行く
丈夫武雄の身
仇を討ち歸らずば
死して護國の鬼と
誓ひし箱崎の

神ぞ知るしめす 日本魂 潔し

天は怒りて海は 逆巻く激浪に
國に響をなす 十餘万の蒙古勢
底の藻屑と消へて 残るはたゞ三人
いつしか雲晴れて 玄海灘月清し

○テニソン氏騎隊進撃の歌

第一

一里半あり一里半 并びて進む一里半
死地に乗り入る六百騎 將は掛れの命下す
士卒たる身の身を以て 譯を糾は分ならず
符をなすも分ならず 此れ命これに従ひて
死ぬるの外はあらざらん 死地に乗り入る六百騎

第二

右を望めば大筒ぞ 前も左りも又筒ぞ
共に打出す砲聲の 天に轟くいかづちの
響の如く凄まじや 彈丸雨飛の間に
猛り立てぞ進むなる 死地にこそ入れ罎の口
勇で乗り入る六百騎

日本魂

我邦人のたれくも 然るにこれの無もの
意に懸くる故ぞかし 打棄られぬものあれど
醜の兇徒討つ時に 後れを取りて敵ばらを
あらざるのみか軍律に 道に背けるのみならず
皇國の人の其數に 忠と孝とにそむくあり
我邦人ぞ邦人を

○我海軍

朝日に輝く日の丸の旗 千島の果より沖繩迄も
二度も今迄穢されざりし 加たきの軍艦幾百あるも
亞細亞に又なき此島國に

從七位 莊司多美作

日本魂あるべきぞ 其身や家の事をのみ
尤も其身其家は 皇國の爲に五月蠅なす
其身や家を思ひあす 討退くる其事の
身は照されて兵士の 人の笑を被りて
數まへられぬ者となり 日本魂持てる身は
忠と孝とをばげひべし

歌詞 外山正一作

閃く皇國の軍艦共よ 開關この方異國の敵に
貴き海岸守れや守れ 千尋の底へと沈てしまへ
天の恵で生れし者は

幼き時より海にはなれて
我をば攻んとする者あらば
かたきの軍艦幾百あるも
風吹き浪立つ嵐の時も
命を惜まぬ日本男兒
浪をば枕に死ぬるも覺悟
かたきの軍艦幾百あるも
弱き船にて大海渡り
鬼神なるぞと呼れし者は
彼より受たる武勇を以て
かたきの軍艦幾百あるも
水雷大砲甲鐵艦を
皇國に仇なす敵のあらば
一々汝の力で懲らし
かたきの軍艦幾百あるも
○成歡驛の喇叭卒
成歡驛のたふかひは
險しき岩も繋る木も

暴風も恐れず波にも怖ず
武勇を比べん怒濤の中に
千尋の底へと沈て見せむ
妻子の爲には沖へと出て
何ぞや恐れん敵の軍艦
君あり國あり又墳墓あり
千尋の底へと沈て見せむ
異國の海岸荒して砲はり
大膽不敵の汝の祖先
天晴守れや我が神國を
千尋の底へと沈て見せよ
自由に扱ふ非凡の手練
萬里を隔る國なりとても
國旗の威嚴を天下に示せ
千尋の底へと沈てしまへ
獨人 エフエス 原作
強ち大戦ならねども
総べて死ぬべき處なり

我軍隊はことごとく
荒野に置ける朝露を
彈雨たばしる其中に
肉と血とより成立らし
折しも聞ゆる喇叭の音
銃の音にさへられず
其喇叭手は誰なるぞ
彈丸飛來る岡の上
我隊長の命令に
又も進めよ進めよと
此聲聞きて我軍の
亦と玉を背にして
國の爲め又名の爲めに
身の丈こそは低けれど
再び吹きし喇叭の音
「進め」す……コハ如何に
彼は喇叭を口にして
「進め」す……コハ如何に

命を賭けて進み行き
唐紅になしにけり
劍光閃く其中に
人々暫し躊躇ひぬ
進めくの信號は
いと清らかに鳴り渡る
姓ハ白神名の源次
脇目も振らず直立し
聊か違ふ所なく
一聲高く奏しけり
瀧津瀬のごと押進み
逃げ行く敵を追撃ちぬ
勵み戦ふ我兵の
膽は身よりも大なり
聞いて再び進みしが
息切れたるか白神よ
立ちたる儘によろめきぬ
彼の喇叭ハ血に染みぬ

赤き心の血を以て
果敢なく息は絶ぬれど
嗚呼岡山の船村の
君の御爲め國の爲め

○嗷呌手の最後

渡るにやすき安城の
敵のうち出す弾丸に
湧立ちかへるくれなるの
先鋒たりしわが軍の
この時ひとりの嗷呌手は
進め進めと吹きしきる
その音忽ち打ち絶えて
打ち絶えたりしは何故ぞ
打ち絶えたりしその時は
かすかになりしその時は
弾丸のんぞを貫けど
嗷呌はなれず握りつめ
たまと其身はくだけでも

染めし嗷呌を尙棄てず
敵に向ひて尙立てり
勇士源次は息絶ぬれ
最後の息は同胞の爲め

菊間義清君合作
荻野理喜治君

名に徒づらのものなるか
波は怒りて水さわぎ
血汐のはかにみちもなく
苦戦の程を知られける
どり佩く太刀の束の間も
進軍嗷呌のそよまじき
再びかそかに聞えたり
幽になりしは何故ぞ
弾丸のんぞを貫けり
熱血氣管にあふれたり
熱血氣管にあふるれど
左手に杖つく村田銃
靈魂天地をかけめぐり

なほ敵軍をやぶるらむ
雲山萬里かけへだつ
君が嗷呌のひいきにぞ

林子平 全上

地理は兵家の知ごと、
心放たぬますらをの
凡そ我邦地の廣さ
海手の備へ何くれと
忠義の心一すぢに
書籍は己が仇となり
根も無きこと、嘲られ
思ひしものか世の中を
路も逢けさみちのくの
晝も小暗き室の中に
過せるうちに亡き人と
されど皇國を愛し身の
明治の御代と成しより
嘉し給ひて忠烈を

あな勇ましの嗷呌手よ
四千餘萬の同胞も
進むれ今と勇むなる

皇國をおもふ誠より
林子平友直は
山も川をも踏んじて
心をおかぬ限も無き
著し出す二巻の
辨知らぬ人々に
時の吏もさもこそど
惑はず書籍と決断め
兄の許に送られて
禁錮められて年月を
なりにし未ぞ哀れなる
なとて此儘朽ぬべさ
最と畏くも天皇は
里の門邊に表はされ

案料も賜はりて
贈らせ給ふ有難き

仰げやあふげ

正五位といふ位まで
身の榮をぞなしにける

高崎正風

其一

仰げやあふげ天壤の
天津御神の詔たまひし
勤かぬもどるたてそめし
そなはりませる君にして
日向の國の高千穂に
しきたまへれ恩澤に
邑長たがひにあらそひて
すくひたすけて天業を
をばした、して諸皇子や
西のひてなる日向より
御稜威の風に草も木も
兄猾のじめ兄磯城らも

其二

大和の國の糧原に

あらん限りいさかぬんと
みことのみかどは高御座
神武のみかどは智仁勇
皇孫瓊々杵の尊より
宮をさだめてまつりごと
まだつるはのぬ國ははし
罪なき民のくるしむを
推ひろめんと雄々しくも
大御軍をひさるまし
ひんがまきして出た、す
なびさしたがひ丹敷戸畔
長髓彦もはるびけり
都をさだめ宮ばしら

ふとしきたて、御位に
つかさをさだめ天の下
また波風のさしぎかし
はつくにしらす天皇と
わかれし如くあさらかに
地球の中に國といふ
國の名おひてどつ國の
國をたてたる天皇の
畝傍の山も高からず
三千餘萬の皇國人
受けしめぐみを忘るなよ

攻取

味方の心は金石ぞ
石の價も何のその
遙に及ばぬものと知れ
奮ふて乗取れ武夫の
彈丸の霰と飛來るも
襲て襲したる事なれば

正八位 武井瀧次郎作

登らせたまひもろくの
しづめ給へば大八洲
國民よろこびまつろひて
わがめたふとみ天地の
君臣の分さだまりぬ
國はあれどもうら安の
人もうらやむたぐひあさ
大御勳功にくらべての
直安池もふか、らず
とほつ祖よりつぎくに
受けしめぐみを忘るなよ

打てど碎けぬ金剛の
日本魂に比べては
堅き敵地や防禦線
譽れを還す、此時ぞ
劔は林を爲すとても
何處じと思ふべき

進めや進めいざ進め
流る、血しほは時の水
長る、勿れ畏る、る

横たふ屍は時の積
敵は幾萬あがどても
是ぞ奇手の本意なる

日本新軍歌終

明治廿九年十一月十五日印刷
全 年十一月十九日發行

編輯兼 發行者 中村芳松
大阪市南區末吉橋通四丁目八十九番邸

印刷者 井下幸三郎
大阪市南區西清水町二百廿二番邸

發賣者 中村鍾美堂
大阪市南區心齋橋北詰